

たか だ
高 田 遺 跡

発掘調査概報

1988

掛川市教育委員会

たか だ
高 田 遺 跡

発掘調査概報

1988

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和62年10月22日から昭和63年3月31日まで実施した静岡県掛川市吉岡字真黒坂1226に所在する高田遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は、高田遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査では、土地所有者の鈴木義則氏をはじめ周辺土地所有者には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当し、市内在住の戸塚和美氏には本概報作成にあたり多大な協力を得ている。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘作業ならびに整理作業には次の方々の参加を得た。

鈴木辰江・村松さと・大場せつ・久保田まさ・萩田ふさ・松浦せい子・松井たつ・石龜まつ・鳥居鈴江・山本喜久恵・鈴木きの・鈴木はつ子・小沢ろく・萩田みさ子・高柳きわ・松井しか・松井田鶴子・長谷川幸子・井野鈴江・宮崎順子（順不同）

6. 調査ならびに本書作成にあたり次の方々からご教示・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

中井弘和・中嶋郁夫・平野吾郎・吉岡伸夫（五十音順）

7. 遺物の実測、遺構・遺物のトレース・執筆を戸塚が、その他の執筆については松本が行なった。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 挿図における方位は、磁方位を示す（1987. 10）
2. 遺物の番号は、実測図と写真図版とで共通である。

目 次

例 言
凡 例
目 次

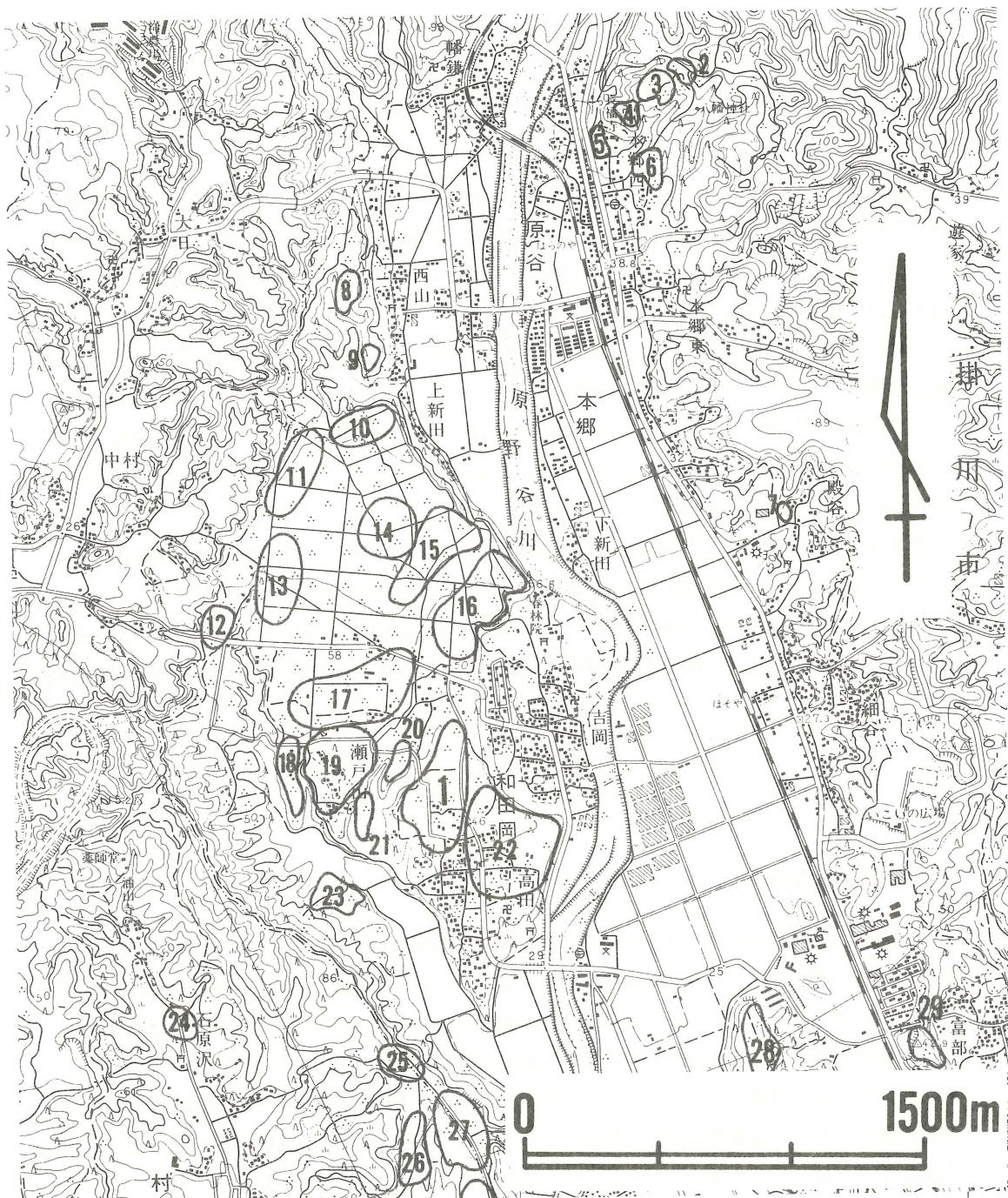
はじめに	2
I 調査の方法と経過	2
II 遺跡の環境	3
III 調査の内容	5
IV まとめ	20

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第2図 遺跡の周辺地形	4
第3図 遺構全体図	6
第4図 S B 02 実測図	7
第5図 S B 04 実測図(1)	9
第6図 S B 04 実測図(2)	10
第7図 S B 04 炉実測図	11
第8図 S B 18 実測図(1)	12
第9図 S B 18 実測図(2)	13
第10図 S B 02 出土土器実測図	15
第11図 S B 04 出土土器実測図(1)	16
第12図 S B 04 出土土器実測図(2)	17
第13図 S B 04 • S P 76 出土土器実測図	18

図 版 目 次

- 図版 I (上) 調査前全景 (西から)
(下) 重機稼動風景
- 図版 II (上) 西区完掘状況 (北から)
(下) 東区完掘状況 (北から)
- 図版 III (上) S B 02床面検出状況 (北から)
(中) S B 02炉検出状況 (北から)
(下) S B 02土器出土状況 (南から)
- 図版 IV (上) S B 04床面検出状況 (北から)
(下) S B 04遺物出土状況 (北から)
- 図版 V (上) S B 04土器出土状況微細 (北から)
(中) S B 04炉検出状況 (北から)
(下) S B 04完掘状況 (北から)
- 図版 VI (上) S D 18完掘状況 (北から)
(中) S D 18遺物出土状況 (北から)
(下) S D 18遺物出土状況微細 (北から)
- 図版 VII (上) S P 76土器出土状況 (西から)
(下) S F 02遺物出土状況 (東から)
- 図版 VIII (上) S B 07完掘状況 (北から)
(下) S H 01完掘状況 (東から)
- 図版 IX (上) S D 03礫出土状況 (東から)
(下) S D 01遺物出土状況 (東から)
- 図版 X 出土土器(1)
- 図版 XI 出土土器(2)
- 図版 XII 出土土器(3)
- 図版 XIII 出土土器(4)



- | | | | | | |
|---------|---------|-----------|------------|----------|--------------|
| 1. 高田遺跡 | 6. 古城 | 11. 東原 | 16. 吉岡下ノ段 | 21. 花ノ腰 | 26. 東山 |
| 2. 八海山 | 7. 殿ノ台 | 12. 今坂 | 17. 吉岡原 | 22. 女高 | 27. 金鎧原(久能山) |
| 3. 又太郎 | 8. 後藤ヶ谷 | 13. 溝ノ口 | 18. 瀬戸山II | 23. 平田ヶ谷 | 28. 岡津原I |
| 4. 安里山 | 9. 中山 | 14. 中原 | 19. 瀬戸山I | 24. 石原沢 | 29. 二反田 |
| 5. 長福寺西 | 10. 城ノ腰 | 15. 高田上ノ段 | 20. 瀬戸山III | 25. 境前 | |

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

はじめに

高田遺跡は、掛川市街地から北西に10km程行った原野谷川右岸に広がる高田原・吉岡原と呼ばれる河岸段丘上に位置する遺跡である。この高田原・吉岡原には、第1図・第2図に示したとおり、縄文時代から古墳時代に亘る多くの遺跡が分布している。なかでも和田岡古墳群（春林院古墳・吉岡大塚古墳・瓢塚古墳・行人塚古墳・各和金塚古墳等）の存在は有名である。

またこの高田原・吉岡原一帯は、茶どころ掛川市にあって、上内田地区とならんで茶の栽培が盛んな地区でもある。いつの時代、何事にも改革はつきもので、この茶樹栽培においても近年来より品種改良が行なわれている。この品種改良では、水はけを考慮した耕作土の入れ替え（地表土と地山土との転換、いわゆる“天地返し”）が伴って行なわれており、これにより遺跡に思わぬ被害をもたらす結果となった。

掛川市教育委員会では、茶園改植に伴い消滅の免れない状況となったこれらの遺跡に対し、せめてもの措置として、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を行なうこととしている。

今回、調査の対象となった高田遺跡のこの地点も、茶園改植の計画があげられた地点で、遺跡の記録保存を目的として、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が行なった発掘調査である。

I 調査の方法と経過

1. 調査の方法

今回行なった発掘調査地点は、昭和57年度・昭和59年度に行なった女高遺跡の発掘調査地点の北200m程の地点である。今回の調査区画は、過去行なわれた調査地点が近くにあるものの遺跡が別の取り扱いとなっていることから、新たに調査地に合わせたかたちで設定した。基本杭は調査区の東側を南北に走る農道に打たれている地境杭を利用して、そこから調査地の北西角に打たれている地境杭を見通して、それを区画の基準線とした。杭は、基準線に乗せ基本杭から5m毎に打ち込み、そこから調査区内へと移していった。区画杭の名称は、基本杭をA-1杭とし、西方向にB-1杭、C-1杭、……とし、90°南方向にA-2杭、A-3杭、……とした。そして、区画の名称はその区画の北東に位置する杭の名称をそのまま充てることとした。つまり、A-1杭の南西に位置する区画の名称はA-1区であり、反対にD-5区の北東に位置する杭の名称はD-5杭である（第3図参照）。

調査時における遺物の取り上げは、遺構外出土遺物については上記の区画に従い表記し取り上げ、遺構内出土遺物については遺構毎の取り上げで行なった。また、遺構の位置の取り扱いも上記設定の区画表示に従った。

現地での図面は、区画に合わせ20分の1縮尺で遺構全体図を作成し、遺構内の遺物出土状況・主たる遺構の平面図あるいは断面図等を10分の1縮尺により作成した。

写真による記録は、プローニーサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズ原画白黒・リバーサル撮影によった。

2. 調査の経過

現地での調査は、周辺で行なった調査の時と同じように、まず畠の耕作土の除去を重機使用により行ない、その後人工による掘削作業を開始した。調査地での排土は、調査地外に置場を確保できなかつたため、調査地内で土を移動させて行なうこととした。したがつて、調査ではまず調査区の西側半分を調査し、終了と同時に埋め戻しをし、次に残りの東側半分を調査した。以下日程を追いながら、調査の経過を記述する。

昭和62年10月22日～10月27日	重機による調査区西側半面の耕作土掘削
10月26日～11月20日	調査区基本杭の設定と区画の設定。人工による荒削り・精査・遺構の検出・掘削・遺物の取り上げ・写真撮影・図面の作成
11月21日～11月25日	重機による調査区西側半面の埋め戻し、および調査区東側半面の耕作土掘削
11月24日	調査区東側半面の人工による荒削り・精査・遺構の検出・掘削
～昭和63年1月12日	・遺物の取り上げ・写真撮影・図面の作成
昭和63年1月13日～1月14日	重機による調査区東側半面の埋め戻し、および調査区全体の整地作業

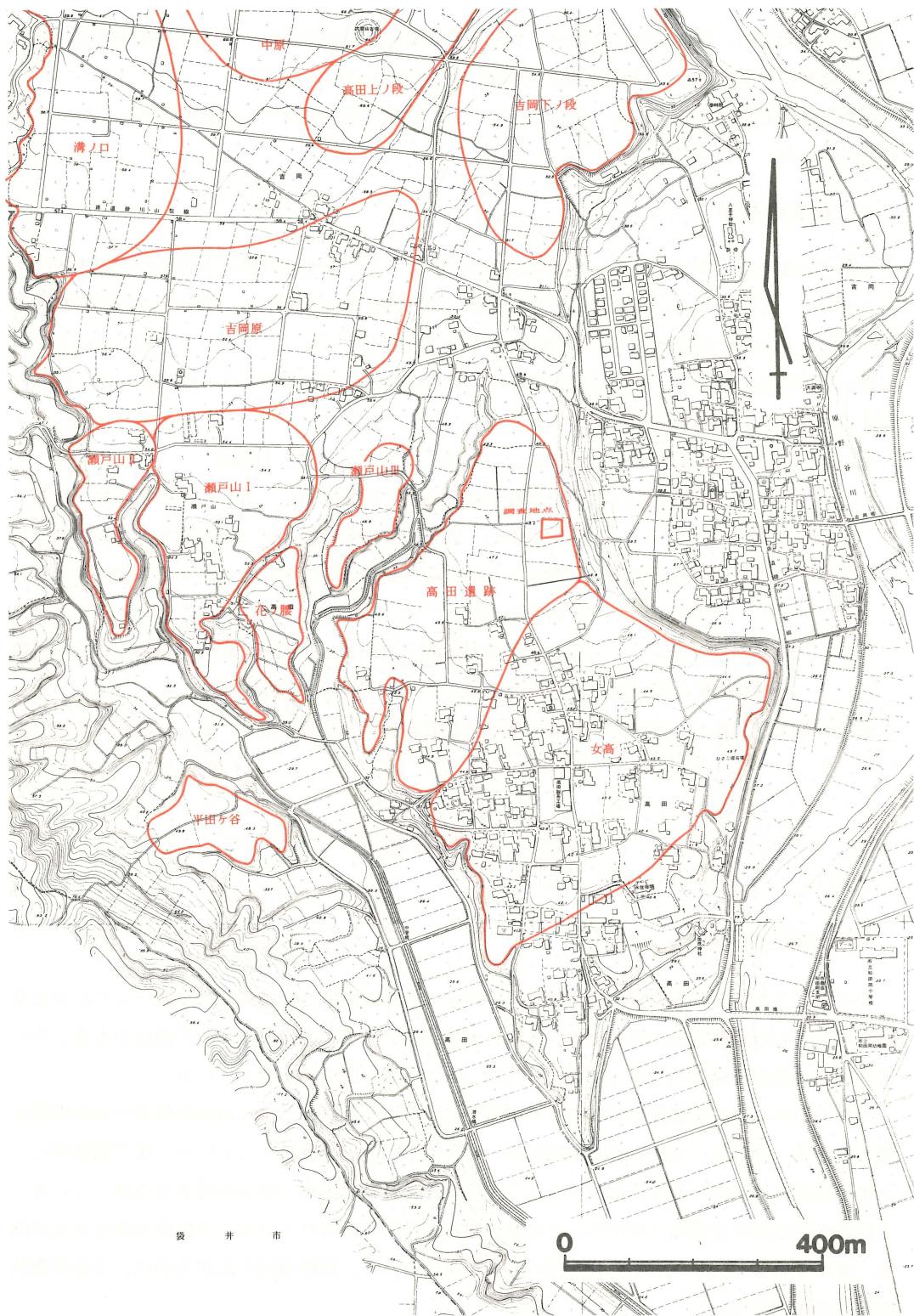
II 遺跡の環境

1. 地理的環境

先にも述べたとおり高田遺跡は、原野谷川が形成した高田原と呼ばれる河岸段丘上に広がる遺跡である。この原野谷川の流域には、上流から下流にかけて大小幾つもの河岸段丘がある。その多くには、高田遺跡と同じように縄文時代からさまざまな遺跡が立地している。

ここでは特に、高田遺跡の所在する高田原ならびにその北側に広がる吉岡原周辺の地形環境を観てみよう。高田原とそれに続く吉岡原は、大きく二つの段丘面をもつてゐる（第2図参照）。上位段丘面は標高60m前後で広がっており、下位段丘面は標高40～50mの高さで広がっている。上位段丘面は俗に吉岡原と呼ばれ、下位段丘面は高田原と呼ばれている。下位段丘面をさらに細かく観ると、標高50m代と標高40m代の二面に分けられる。高田遺跡の広がる面は、下位の標高40m代の面である。

もう一度第2図を観て頂くと、吉岡原と高田原の西側に南から北方向に入り込む幾本かの谷が



第2図 遺跡の周辺地形

あることに気づく。これらの谷によって段丘の西側部には、舌状台地のような地形が形成されており、この地形上にも縄文時代からの遺跡が広がっている。そして、これらの谷には今でも枯らしたことのない湧水源がいくつか確認できる。さらに、現在この谷を利用して田面が広がっている（いわゆる谷水田が行なわれている）ことを付け加えておく。

段丘面の東側に目を転じると、段丘下には古き時代に段丘に沿って原野谷川が流れていた痕を確認することができ、そのすぐ東側に微高地（古くは川の中州であったものか）を確認することができる（ここが古くから吉岡の集落が開けていた一帯である）。

以上のような周辺地形の中にあって、高田遺跡は当該地点に広がりをみるのである。

2. 歴史的環境

高田遺跡の周辺に分布する同時代の遺跡は、第1図に示したように数多くある。ここでは、第2図を参照に、高田原および吉岡原における同時代の遺跡の分布を観ていただくと同時に、表面採取資料に基づき（個々の遺跡は集落跡とか墓跡とかの性格の異なるものを含んでしまうが）、各遺跡の時間的継続について紹介する。

ただし、第2図を観ると個々の遺跡の範囲が広く何か不自然な感じを持つと思われるが、現地に行かれた方なら理解して頂けるように、この一帯では弥生時代後期から古墳時代前期の遺物がどこでもと言うくらいに採取できるのである。しかし、それでも多量に採取できる所とできない所があり、それらを参考にして示したもののが第2図と考えていただきたい。

- a. 縄文時代晩期末に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……瀬戸山Ⅱ
- b. 縄文時代晩期末に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……吉岡下ノ段
- c. 弥生時代中期に成立し弥生時代中期で終結する遺跡……なし
- d. 弥生時代中期に成立し弥生時代後期まで継続する遺跡……なし
- e. 弥生時代中期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……女高
- f. 弥生時代後期に成立し弥生時代後期で終結する遺跡……中原
- g. 弥生時代後期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……溝ノ口・吉岡原・高田上ノ段・瀬戸山I・瀬戸山III・花ノ腰
- h. 弥生時代後期に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……高田 以上である。

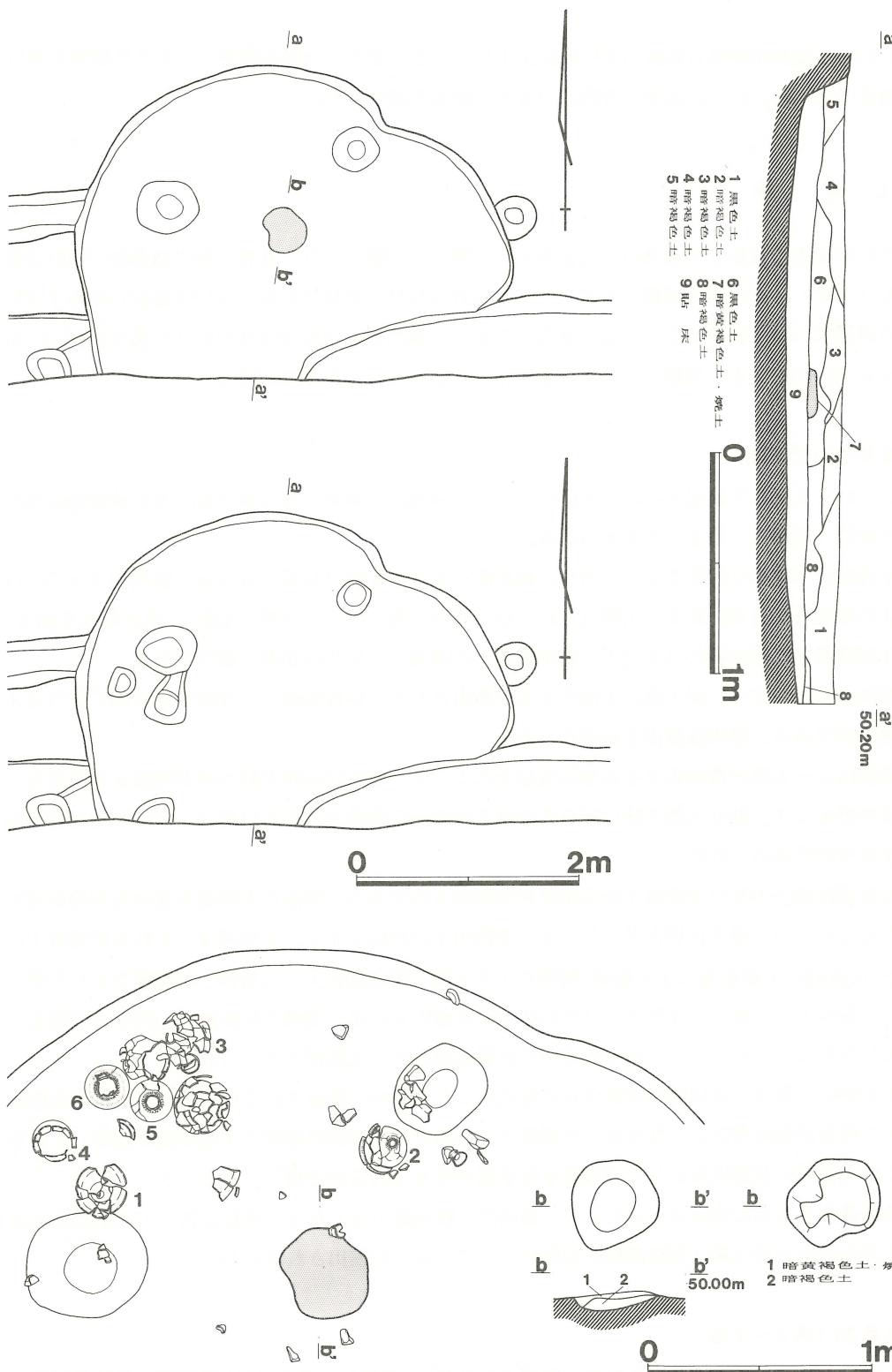
III 調査の内容

今回の調査では、近世の土塙（S F）2基、古墳時代の古墳の周溝と思われるもの（S D18）・その他の溝状遺構（S D）20条・竪穴住居跡（S B）3軒、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居軒6軒・掘立柱建物跡（S H）2棟・土坑（S F）2基・その他の小穴（S P）多数等を検出した。出土遺物は、弥生時代後期と古墳時代前期の2軒の焼失家屋そして古墳の周溝を中心に、完形の土器あるいは破片の土器が多数あった。また、弥生時代後期の焼失家屋（S B 02）

D | E | F | G | H | I | J | K



第3図 遺構全体図



第4図 SB 02実測図

出土の押し潰れた壺から多量の炭化米が出土している。等々、今回の調査は、大きな成果をあげた調査であった。以下、遺構と遺物に分けその概要を説明する。

1. 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、前記のように竪穴住居跡（S B）9軒、掘立柱建物（S H）2棟、土塙（S F）4基、溝状遺構（S D）21条、小穴（S P）多数である。今回は紙面の都合上すべての遺構について紹介することはできないため、比較的遺存状態の良好であった焼失住居2軒（S B 02・04）と、規模・形状に特徴が見られる溝S D18を簡単に紹介していく。

S B 02（第4図）

G～H—5区にて検出された。南側はS B 05と重複し、調査区外に延びる。出土遺物から弥生時代後期（菊川式）のものと考えられる。

平面形は不整形な円形を呈しており、確認面における規模は長径3m76cm、短径約3m50cm（住居南側はS B 05によって搅乱され、かつ調査区外に延びる為推定規模）、深さ48cmを測る。

住居跡覆土は基本的には黒色土と暗黄褐色土が堆積し、炭化材が多く検出された。

屋内施設としては、炉1基、主柱穴4本が検出された。炉は床面上より貼り床を浅く掘り込んだ地床炉である。壁溝は検出されなかった。

床面はローム質の黄褐色土を大量に含む土によって、厚さ10cm程の貼り床が形成されており、ほぼ平坦をなす。貼り床徹去後の掘り方では3基の小穴が検出された以外は、ほぼ平坦で部分的に小さな凹凸がみられた。

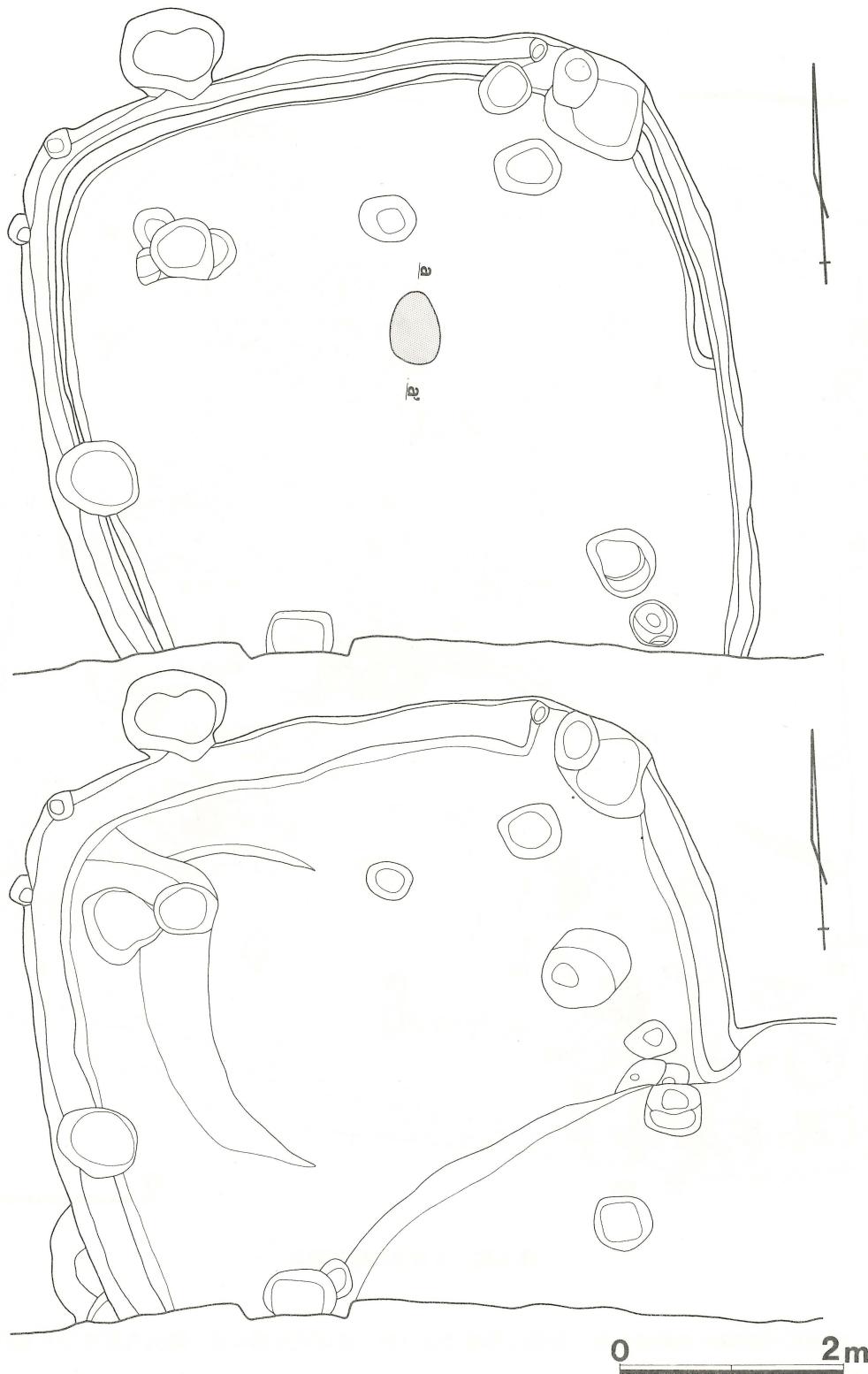
本住居は覆土中及び床面直上から炭化材が検出されており、床面にも焼成を受けた部分が認められることより、焼失住居と考えられる。遺物出土状況図で示した土器群はいずれも床面直上出土で、火災時の上屋倒壊による破損、耕作による欠損（確認面直上には耕作土が堆積する）を受けているものの、これらの完形またはそれに近い状態のものは、遺構内に終着した時点での姿を示しているものと言えよう。つまり火災時に放置遺棄された土器群と考えられる。

さて炉の位置は、住居跡中央部から北壁に寄った部分から検出されている。このことから住居跡入口部を南側に想定したならば、土器群は入口部とは反対側の北壁と主柱の間に集中しておりそこが土器類の収納場所としての機能を有す場が考えられるのではないだろうか。

放置遺棄を如実に物語るものとして、遺物出土状況図で示した5（壺形土器）の東側にある壺形土器内からは炭化米（現在詳細な分析を行っている）が検出されている。

S B 04（第5～7図）

F～G—4～5区にて検出された。南側はS B 09と重複し、S B 02同様調査区外に延びる。出土遺物からは古墳時代前期のものと考えられる。



第5図 S B 04実測図(1)



第6図 SB 04 実測図(2)

平面形は南側が未調査の為、全貌は明確でないが、ほぼ正方形に近い隅丸方形を呈すものと考えられる。

確認面における規模は推定で長径8m20cm前後、短径8m14cm、深さ40cm程度を測る。

住居跡覆土は基本的には黒色土と暗褐色土が堆積し、炭化材が多量に含まれていた。

屋内施設としては、炉 1 基、主柱穴に相当するものと思われるもの 4 本、それ以外に小穴が数基検出された。

壁溝は全周に確認できるが、西側から北東側ならびに東側の一部にかけて周堤帯のような段が形作られており、

S B 02 とは全く構造・規模の異なるものである。

炉は床面上より貼り床を残く掘り込んで造られており、さらに白色粘土を使って環状に一周する帶をもつ、いわゆる火皿が設けられている。(第 7 図)

床面はローム質の黄褐色土を大量に含む土によって、厚さ 5 cm 程の貼り床が形成されており、ほぼ平坦をなす。貼り床撤去後の掘り方では西側部で凹地が検出され、他にも小穴が数基検出された。(第 5 図)

本住居にも S B 02 同様、覆土中及び床面直上から炭化材が検出されており(第 6 図)、床面にも焼成を受けた痕跡が認められることより、焼失住居と考えられる。遺物出土状況図(第 6 図)で示した土器群はいずれも床面直上出土で、S B 02 同様、住居火災時に放置遺棄された土器群と考えられる。

さて炉の位置より住居跡入口部を想定するならば、炉は住居跡中央部から北壁に寄った部分から検出されていることから、入口部は南側と考えられよう。入口部から向って右側の主柱と壁の間に土器の集中が認められる。本住居跡の場合はそこが土器類の収納場所として捉えられる。

S D 18 (第 8 ・ 9 図)

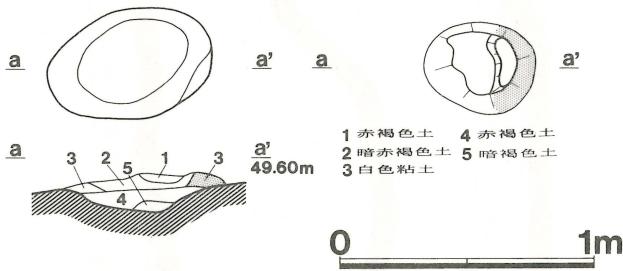
D ~ E - 1 ~ 4 区にて検出された。検出し得た部分の形状より東側調査区外にも方形状に延びるものと考えられるが、別の形状で広がる可能性もある。

出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。

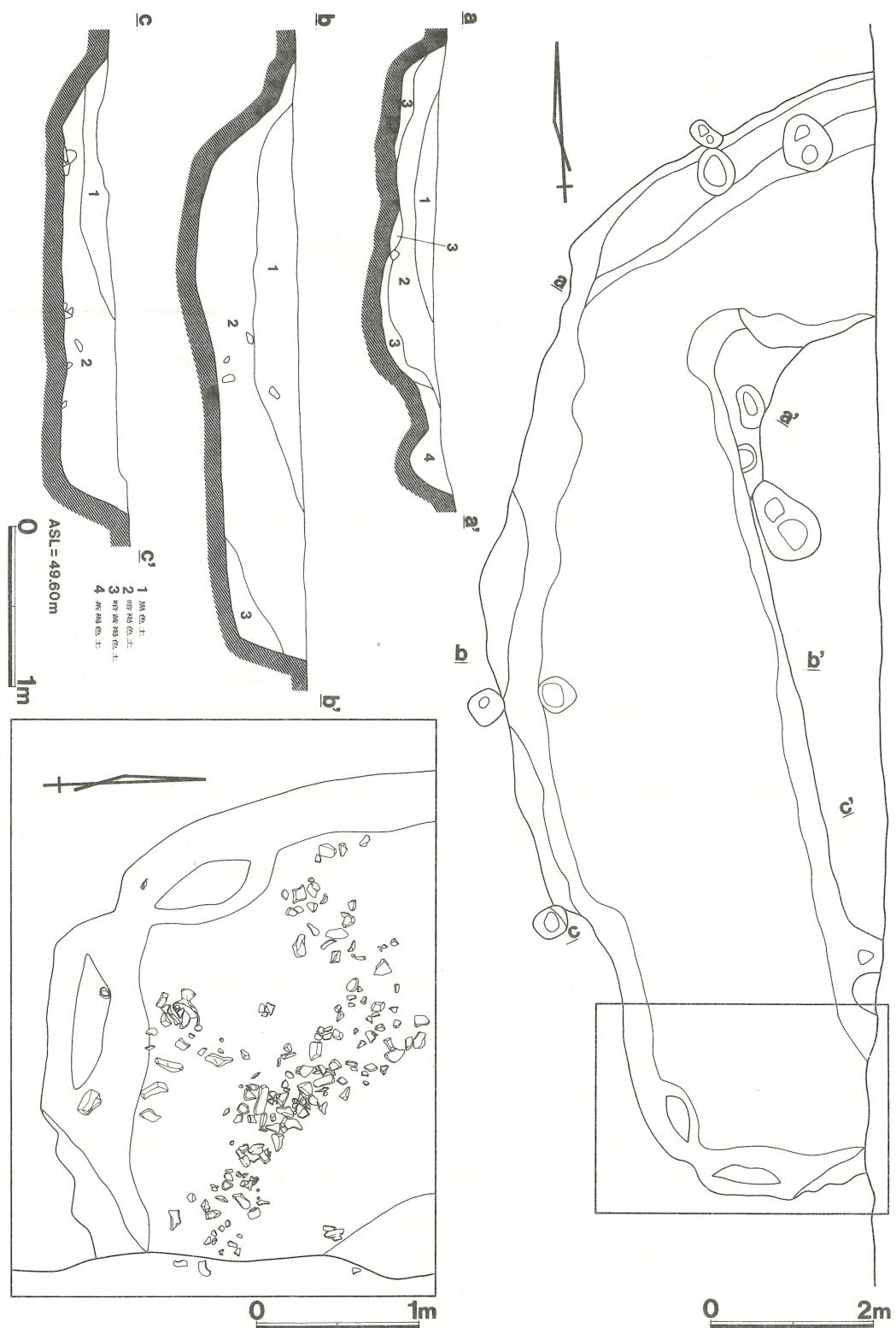
規模・形態について、全貌が明確でないためここでは検出し得た部分についてのみの規模を示しておく。確認面における規模で 1 辺の全長 12 m 48 cm、最大幅 3 m 65 cm、深さ 62 cm を測る。

北西コーナー部では若干幅が狭くなり、西溝の中央部では最大幅となる。部分的にテラスが設けられているが、断面形態からすると基本的には幅広の U 字形を呈す。底面は西溝の中央でやや深くなり、多少の凹凸は認められるもののほぼ平坦をなす。

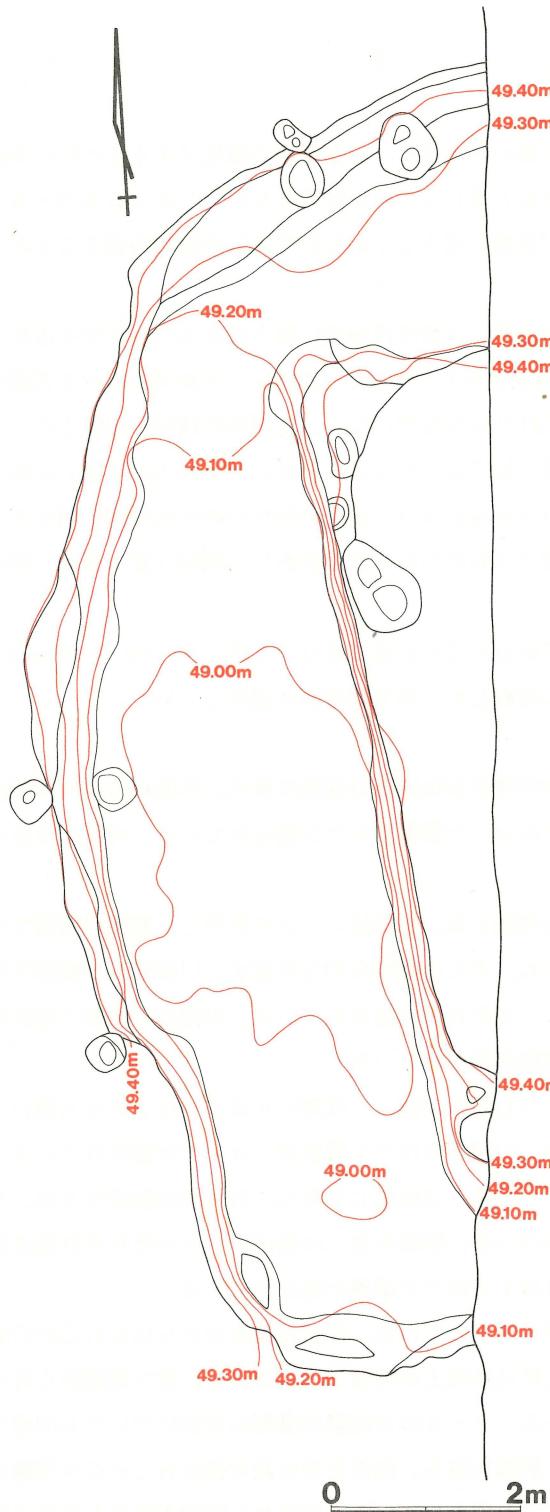
溝の覆土は、① 黒色土(ローム粒子を含有する。粘性・しまりのある土)、② 暗褐色土(ローム粒子を含有する。粘性・しまりのある土)、③ 暗黄褐色土(小砂利を含有する。粘性・しまりの強い土)、④ 茶褐色土(ロームとの溶混が激しい。粘性・しまりともに強い土)、によって構成



第 7 図 SB 04 炉実測図



第8図 S D 18実測図(1)



第9図 S D 18実測図(2)

される。

遺物出土状況図（第8図）で示すように溝内には土器とともに多量の礫が、溝内中央部を中心に包含されていた。

さてこの溝の性格について触れておく。

高田遺跡に隣接する女高遺跡からは、方形周溝墓と考えられる溝状遺構が検出されている。そのうち1号方形周溝墓は調査区外に延びるため全貌は明確でないが、その形態はコーナー部において断ち切れとなる陸橋を有すものである。規模は下場で全長9m67cm、最大幅2m40cm深さは35cm程である。出土遺物より時期は古墳時代前期としている。

S D 18と女高遺跡の1号方形周溝墓と比較するならば、規模においては明らかにS D 18は大きい。

S D 18の断面形態は前記のように幅広のU字形を呈し、底面は平坦をなしており、方形周溝墓にみられるV字形、もしくは底面が狭少するものとは異なる。この形態は、むしろ古墳の周溝に近いものと言えよう。

そして方形周溝墓にみられる群在が認められない点も指摘されよう。今回の調査地点は台地の東端に位置し、調査区外に同様の溝状遺構が広がる可能性は少ないと考えられる。

以上の点を考慮するならば、S D 18は古墳の周溝と考えるべきであろう。

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんど土器の類である。出土土器の総量はポリコンテナ(545×336×200)35杯程度で、調査面積の割合すると決して多いとは言えない。しかしSB02・SB04の焼失住居からは完形・準完形のものが多量に出土しており質的には好資料を得ることができたと言えよう。

出土遺物を時代的にみていくと、弥生時代後期～古墳時代前期に属されるものが大半を占める。特にSB02・04出土の火災によって放置遺棄されたこれらの土器群は、当地域における該期の土器編年を考える上での好資料を提示してくれたばかりではなく、生活時の状況が中断されたものと捉えられることから、住居内の家財道具を知ることができると共に、住居内の「場」を復元するための資料が得られる性格をも有していると言えよう。前記の時代の他に近世期に属するものとしてSF01・02の土塙墓からは、人骨とともにかわらけ、鉄製品、銅錢（寛永通宝）等が出土している。

今回は紙面の都合上すべての遺物について紹介することはできないため、SB02・04から出土した完形・準完形品を抽出し、第10～13図に掲載した。以下番号順に説明していく。

1～6はSB02からの出土土器である。

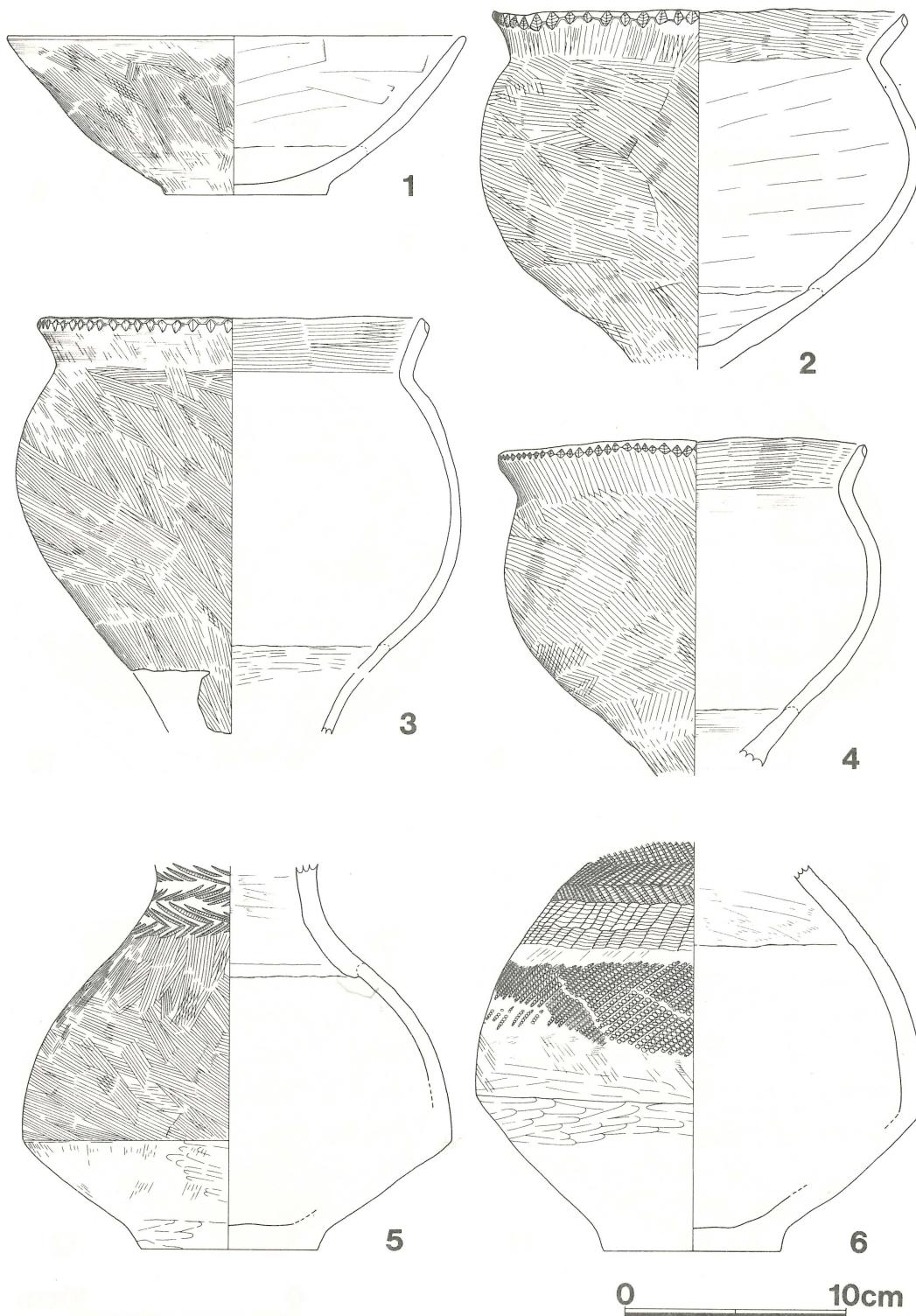
1は鉢形土器である。平底の底部よりやや内彎きみに開き口縁部に致る。外面には全体に斜位のハケが施されているが、口縁部と体部下半にはハケ調整後ナデが施されている。内面には板ナデ整形及びナデ調整が施されている。

2～4は台付甕形土器である。2は脚部を欠損する。頸部はくの字に屈折し、胴部は底部でやすぼまるが球形に近い。口唇部は面取りされ、そこに明瞭な刻目を施す。口縁部及び胴部下半では縦位のハケ、胴部中位では横・斜位のハケがそれぞれ施されている。内面は口縁部で横位のハケが、それ以下では板ナデ整形及びナデ調整が施されている。

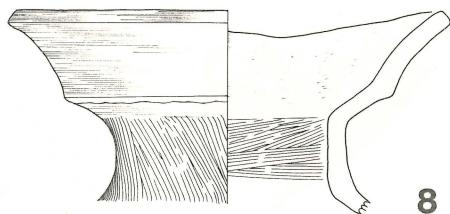
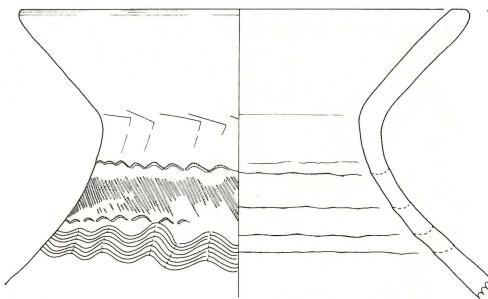
3は底部から脚部を欠損する。頸部は2よりも屈折が弱く、底部のすぼまりは2よりも強い。内外面の整形・調整は2とほぼ同じであるが、口縁部ではハケ調整後ヨコナデが施されている。

4は脚部を欠損する。全体のプロポーションは3とほぼ同じである。口唇部は面取りされ、そこに刻目を施す。口縁部及び胴部下半は縦位のハケ、胴部中位では斜位のハケがそれぞれ施されている。内面は口縁部に横位のハケが、それ以下ではナデ調整が施されている。

5・6は壺形土器である。いずれも口縁部を欠損している。住居跡覆土中からはこれらの口縁部片は検出されておらず、本住居確認面直上には耕作土が堆積していること、出土状態から考えてこれらの欠損は耕作によるものと考えている。2～4の台付甕の脚部の欠損についても同様であろう。5は太い頸部からややズングリした胴部に致る。体部下半に最大径を有しそこに明瞭な稜をもつ。頸部には2段に亘って櫛刺突羽状文が施されている。肩部から胴部中位にかけては縦・斜位のハケが施されている。胴部下半はやや摩滅しているがハケ調整後のミガキが部分的に認

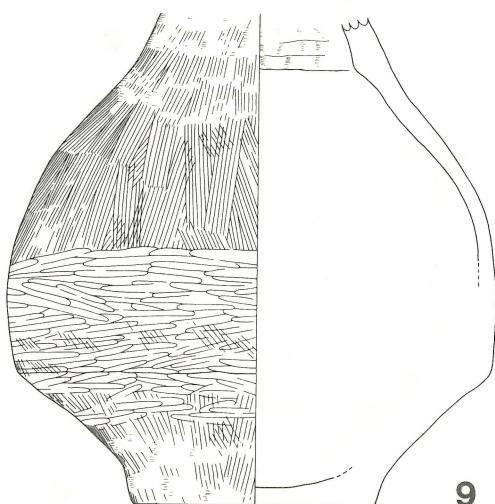


第10図 S B 02 出土土器実測図

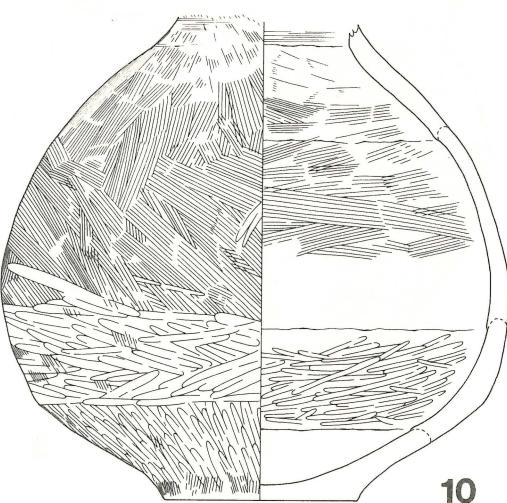


7

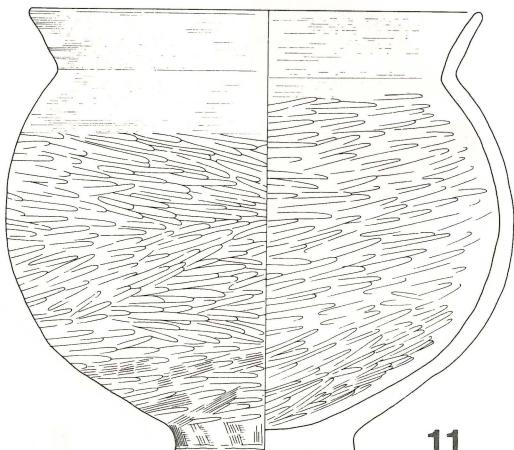
8



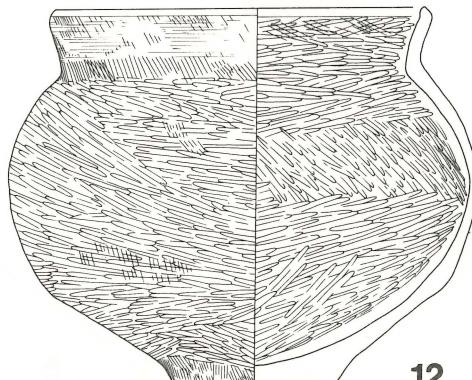
9



10



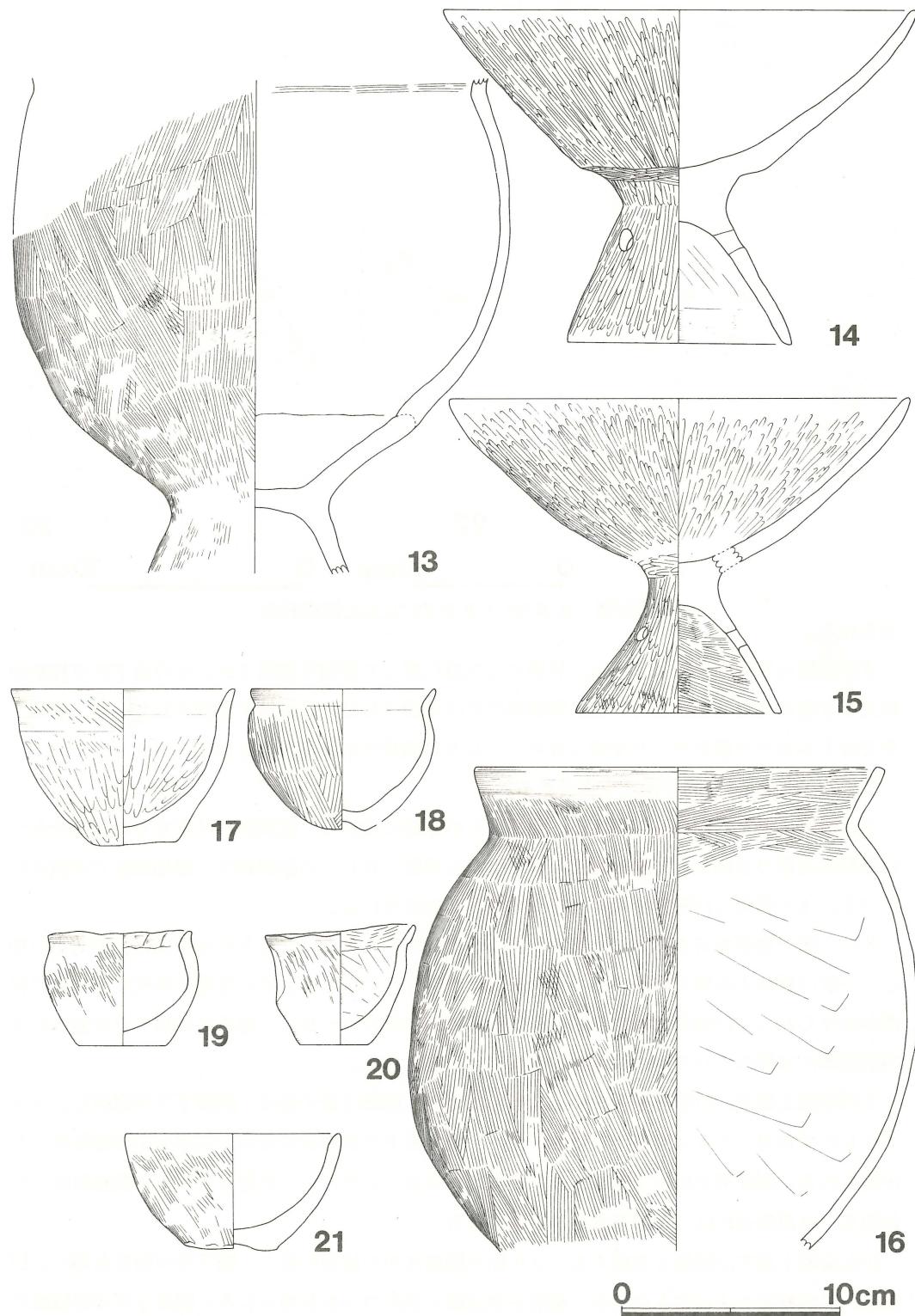
11



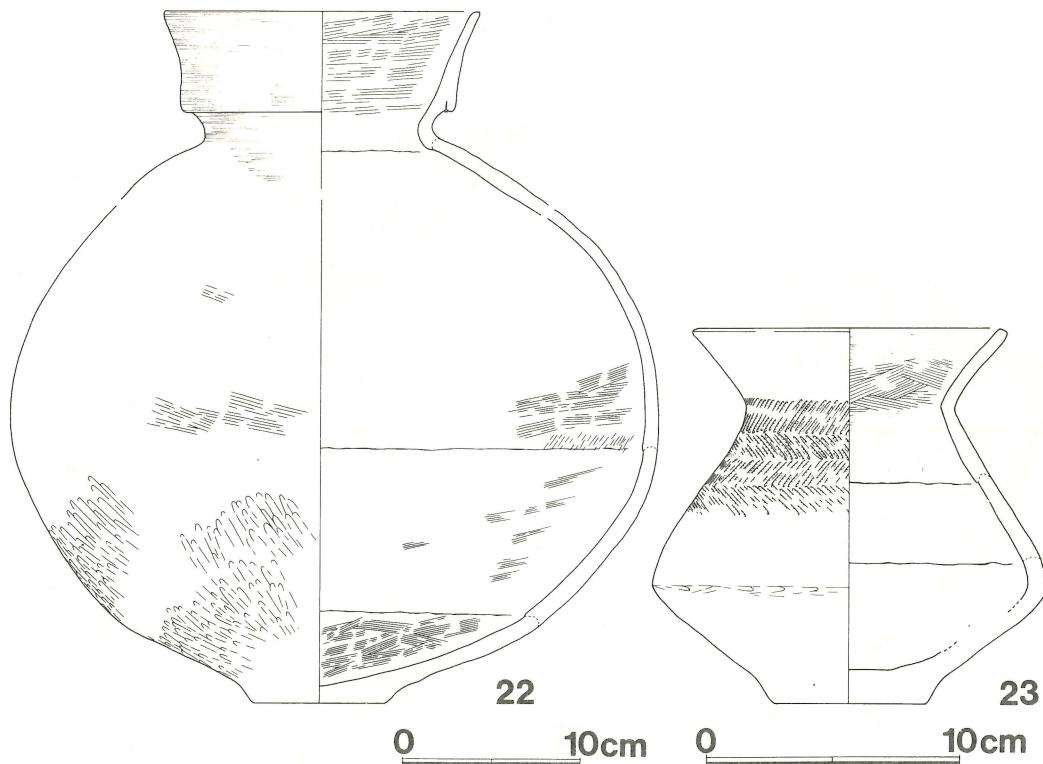
12

0 10cm

第11図 S B 04出土土器実測図(1)



第12図 SB 04 出土土器実測図(2)



第13図 S B 04・S P 76 出土土器実測図

められる。

6の文様は胴部中位にまで及ぶ。肩部には2段に亘って櫛刺突羽状文が、その直下には櫛描波状文が2段に亘って施されている。胴部中位には単節（L R）の斜縄文が施されている。胴部下半では上からハケ後ナデ、ハケ後ミガキ、ミガキの調整がそれぞれ施されている。

7～22はS B 04からの出土土器である。

7は壺形土器で、胴部を欠損する。頸部はくの字形に屈折し、直線的に外反する口縁部をもつ。口唇部は面取りされる。文様は肩部のみで上から単節（R L）の結節縄文、櫛描波状文が施されている。また頸部と口縁部の境には板ナデ整形が認められる。

8は二重口縁部を有する壺形土器で、胴部を欠損する。垂直に立ち上がる頸部は、胴部との境と、一次口縁部との境で屈折する。一次口縁は水平ぎみに広がり、その先端に外反する二次口縁部が設けられる。口唇部は面取りされる。頸部には斜位のハケが、口縁部には横ナデが施される。内面頸部には横位のハケが、口縁部には横ナデが施される。

9は壺形土器で、口縁部を欠損する。頸部は太く、肩部は若干張る。胴部下半で屈折し、ズングリしたプロポーションを呈す。頸部にはハケ調整後ナデが施されるが、胴部上半は縦位のハケが施される。胴部下半には丁寧なミガキが施されるが、下方にいくに従ってミガキ調整前のハケが残る。底部周辺にはハケ調整後ナデが施される。

10も壺形土器で口縁部を欠損する。9に比べ胴部はやや球形に近く、胴下半の屈折も弱い。肩部はハケ調整後ナデが施されるが、胴部上半は縦・斜位のハケが施される。胴部下半には横位のミガキ、底部周辺には縦位のミガキがそれぞれ施されているが、ミガキ調整前のハケが部分的に認められる。内面には胴部上半にはナデとハケが、下半にはミガキがそれぞれ施されている。

11は平底の甕形土器である。胴部は球形を呈し、頸部はくの字形に屈折する。口縁部から肩部にかけては横ナデが、胴部には横・斜位のミガキが施される。胴部下半にはミガキ調整前のハケが認められる。内面も外面同様口縁部から頸部にかけては横ナデが、胴部にはミガキが施されている。

12も平底の甕形土器である。頸部はくの字形に屈折し、胴部は球形に近いプロポーションを呈すが、下半部には弱い屈折が認められる。口唇部ではやや内側に肥厚させる。口縁部はハケ調整後横ナデが施される。胴部は横・斜位のミガキが施されるが部分的にミガキ調整前のハケが認められる。底部周辺にはハケのみが施される。

13は台付甕形土器である。口縁部から胴部の一部、脚端部を欠損する。胴部ズン胴型で、底部は平坦をなす。胴部から脚部にかけて縦位のハケが施されているが、脚部は摩滅が著しい。内面には頸部の一部に横位のハケが認められ、胴部にはナデが施される。

14は高坏形土器で、口縁部の一部と脚の一部を欠損する。坏部は底部で屈折し、口縁部は内彎ぎみに開く。接合部は太く、脚部は直線的に開き、三方に円窓をもつ。全体に縦位のミガキが施されているが、坏底部には横位のミガキが施されている。坏部内面は摩滅が著しいが脚部にはナデが認められる。

15も高坏形土器で、坏部の約半分を欠損する。坏部は屈折することなく、口縁部は内彎して開く。脚部はほぼ直線的に開き、三方に円窓をもつ。全体に縦位のミガキが施されているが、接合部には横位のミガキが施される。坏部内面にやや摩滅ぎみであるが縦位のミガキが認められる。脚部に斜位のハケが施されている。

16は台付甕形土器で、底部から脚部を欠損する。頸部はくの字形に屈折し、ズン胴型の胴部を呈す。口唇部は面取りされ、口縁部上半は顕著に横ナデ調整される。頸部から胴部全面には縦位のハケが施される。内面は口縁部に横位のハケ、胴部には板ナデが施されている。

17~21はいずれも小型鉢形土器である。全体形により3タイプに分けられる。頸部に屈折がみられ、平底をなすもの(17・19・20)。頸部が屈折し、胴部は球形で丸底をなすもの(18)。頸部の屈折はみられず、底部より内彎して口縁部に致るもの(21)。調整はほとんどが口縁部の横ナデが顕著で、胴部にはハケ又はミガキが施されている。

22は折り返し口縁部を有す大型の壺形土器である。胴部は球形に近く、頸部は太い。口縁部から頸部にかけては顕著なナデが施されている。胴部は摩滅が著しいが、上半部はハケ調整後ナデが、下半部にはハケ調整後ミガキがそれぞれ施されている。

23はS P 76出土の小型壺形土器である。口縁部は直線的に開き、口唇部は面取りされる。胴部下半に最大径があり、そこに明瞭な稜を有す。外面全体に摩滅が著しいが、頸部から肩にかけては櫛状工具による羽状刺突文が二段に亘って施されている。胴部下半にはミガキが認められる。

以上が今回紹介した土器群である。土器の個々の特徴より大まかな編年的位置付けをするならば、S B 02の土器群は弥生時代後期(菊川式)、S B 04の土器群は古墳時代前期となろう。今後は編年の好材料としてだけではなく、当時の生活復元の材料としても検討してみる必要があろう。

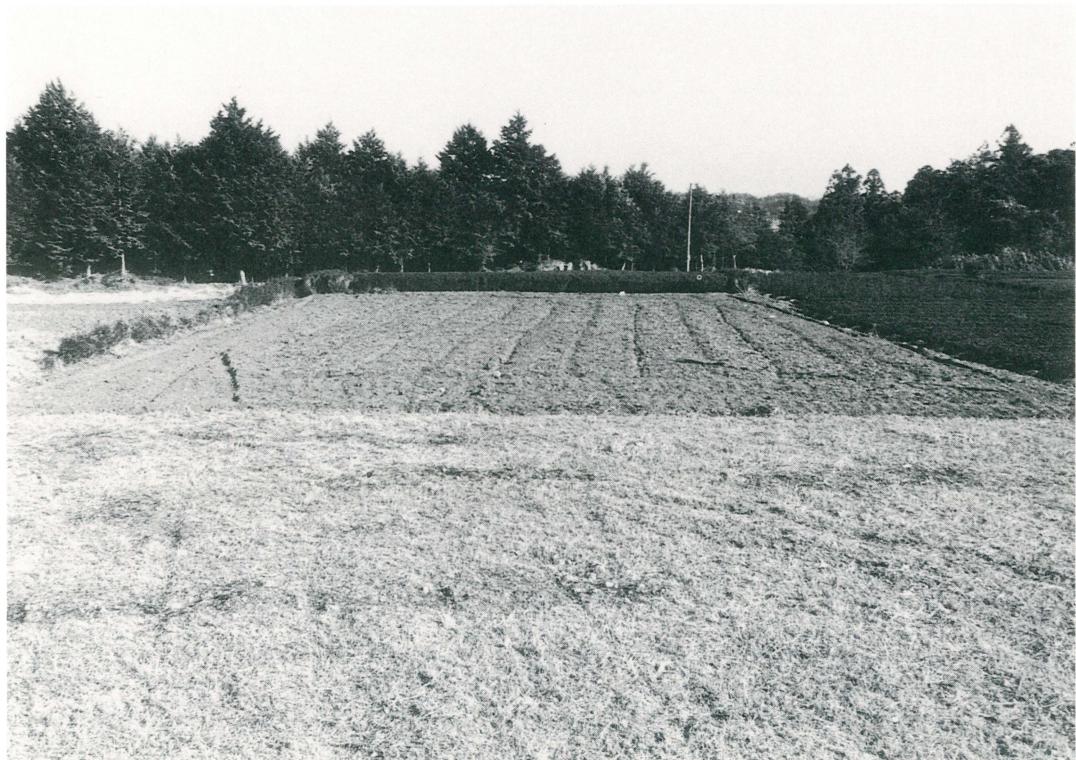
IV　まとめ

今回の発掘調査では、調査区の面積の割りには密度の濃い内容であった。そこで、ここではそれらの成果と問題点をいくつかあげ、まとめとしたい。

1. 調査区の東端において検出した溝 S D18が古墳の周溝であるとするならば、新発見の古墳となる。調査時に行なった調査区東面の土層観察により、その盛り土の状況を確認しているので、今後さらに検討を加えていきたいと考えている。
2. 今回の調査では、弥生時代後期と古墳時代前期の明らかに時代の異なる住居跡を検出した。これらは、平面の形状が前者は不整円形（橢円形と言うべきか）、後者は方形の住居跡で異なる。あるいは、住居跡内の壁溝の有無についても前者には無く、後者には確認された。今後、それぞれの属性をいくつかあげ、比較検討を加える必要があると考えている。
3. S B02 と S B04 とが焼失家屋であったことから、当時使用されていたままに近い状況で土器などが出土した。これは、当時の家の空間利用がどのようにであったかを知るうえで、重要な資料になるとを考えている。今後の検討課題である。
4. S B02 で出土した壺の中から、炭化米が出土した。これは、言うまでもなく住居跡からの出土で、まさに食膳に上ろうとした状態での米である。今後、この米に科学的な分野での調査を行ない、どんな米か、どんな状態で壺に入っていたのか、等を調べていきたい。

まだまだ問題点をあげれば限りがないほど、今回の調査からは成果があった。今後、これらを整理し別の機会を得て報告していきたい。

図 版



調査前全景（西から）



重機稼動風景

図版
II



西区完掘状況（北から）

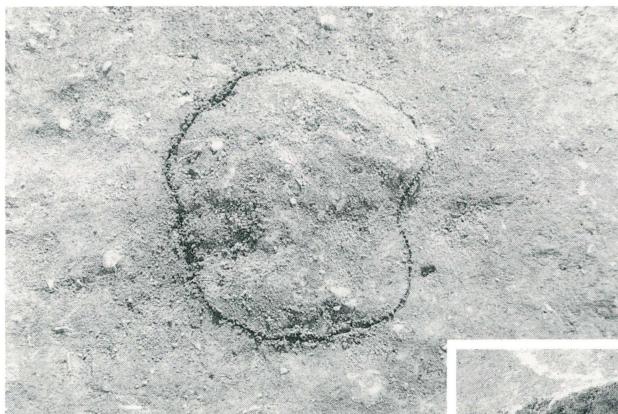


東区完掘状況（北から）

図版
III



SB02 床面検出状況（北から）



SB02 炉検出状況（北から）



SB02 土器出土状況（南から）

図版
IV



SB04 床面検出状況（北から）



SB04 遺物出土状況（北から）



SB04 土器出土状況微細（北から）



SB04 炉検出状況（北から）



SB04 完掘状況（北から）

図版
VI



SD18 完掘状況（北から）



SD18 遺物出土状況（北から）

SD18 遺物出土状況微細（北から）





SP76 土器出土状況（西から）



SF02 遺物出土状況（東から）

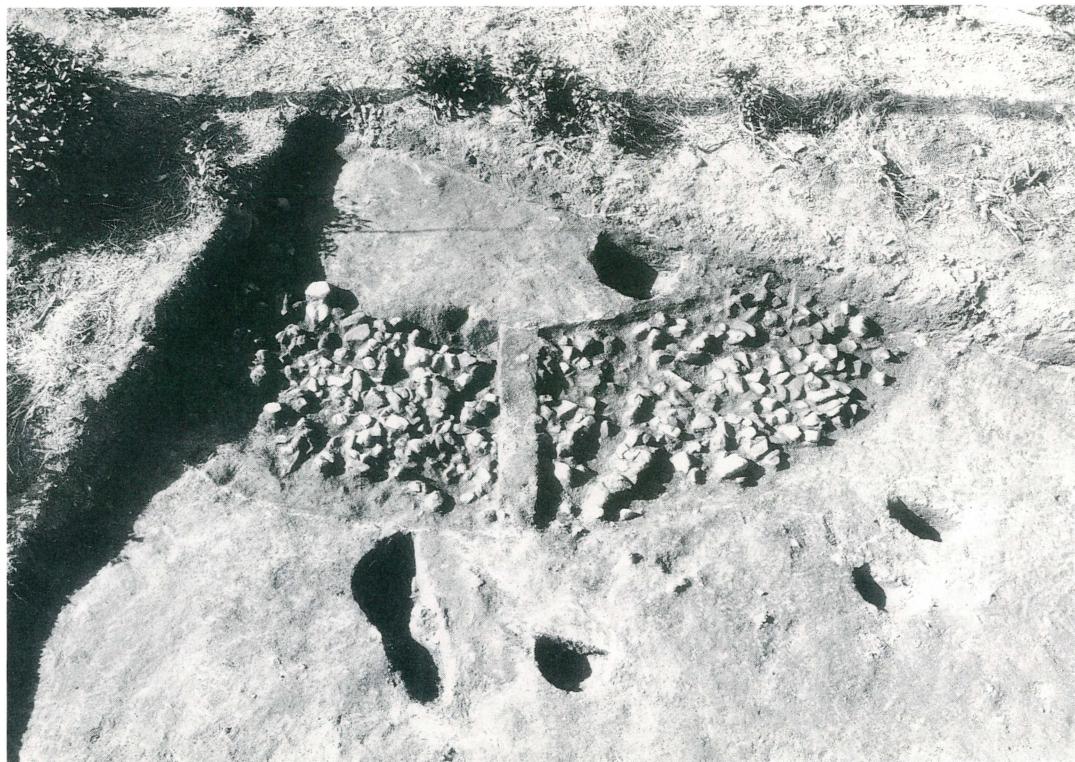
図版
VIII



SB07 完掘状況（北から）



SH01 完掘状況（東から）



SD03 磯出土状況（東から）

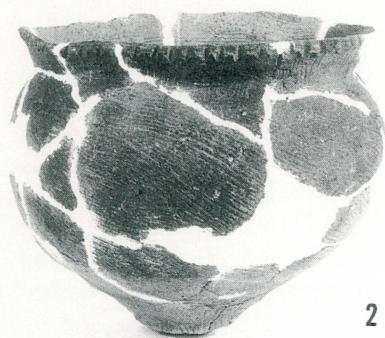


SD01 遺物出土状況（東から）

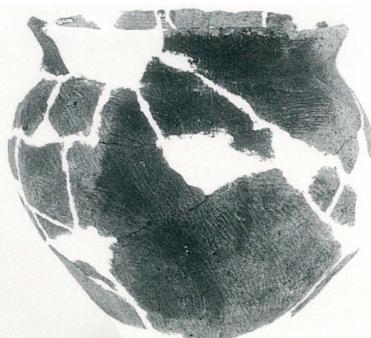
図版 X



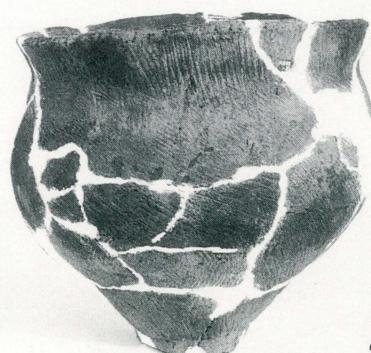
1



2



3



4



5



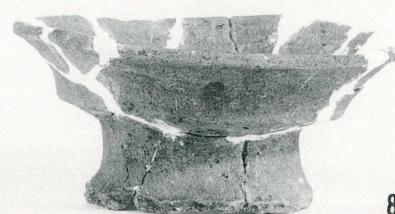
6

出土土器(I)

図版
XI



7



8



9



10



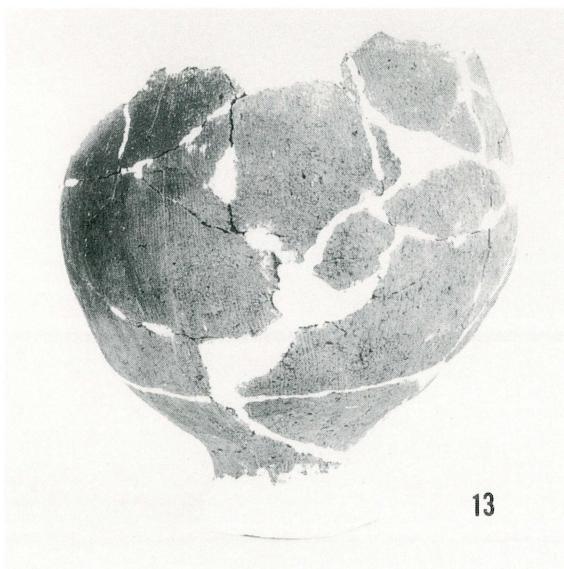
11



12

出土土器(2)

図版
XII



13



16



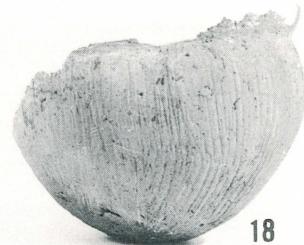
14



15



17



18

出土土器(3)

図版
XIII



19



20



21



23

出土土器(4)

高田遺跡

発掘調査概報

昭和63年3月31日

掛川市教育委員会
編集発行 掛川市水垂51
TEL (0537) 24-7773

株式会社 三創
印刷所 静岡市中村町166-1
TEL (0542) 82-4031

